

【Ⅰ】卑弥呼の鏡——金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を中心として

河村哲夫

銅鏡百枚

『魏志倭人伝』には、魏の皇帝から卑弥呼に対して「銅鏡百枚」等を下賜する詔書が発せられ、正始元年(240)帯方郡より卑弥呼に届けられたことが記されている。

この「銅鏡百枚」については、九州北部から出土する後漢式鏡——内行花文鏡、方格規矩鏡、獣首鏡、夔鳳鏡、盤龍鏡、鳥文鏡、双頭龍鳳文鏡、位至三公鏡などが有力とされ、邪馬台国九州説の大きな論拠の一つになっている。

たとえば、奥野正男氏の『邪馬台国はどこだ』(梓書院)による後漢鏡の分布は次のとおりとなる。

		中国鏡		国産鏡		計
		前漢鏡	後漢鏡	大型	小型	
九州	福岡	103	126	5	38	272
	佐賀	10	32		20	62
	大分	2	21		4	27
	熊本		6		11	17
	長崎	3	4		21	28
	鹿児島		1		3	4
	計	118(97.5)	190(82.6)	5	97(66.4)	410(81.5)
本州		3	40	1	49	93
全国計		121	230	6	146	503



これをみると、後漢鏡の分布は、北部九州——とりわけ福岡県が圧倒的で、邪馬台国の中心地が福岡県にあったことをうかがわせる結果となっている。

安本美典氏も同様の観点から、邪馬台国朝倉説を唱えておられることは周知のとおりである。

これに対して、近畿地方を中心に前方後円墳から出土することの多い「三角縁神獣鏡」を卑弥呼の鏡とするのが近畿説の大勢であったが、現在では、

- ① 中国本土から一面も出ない。
- ② 南朝的な意匠である。
- ③ 金属分析上、中国産ではない。
- ④ 日本で 500 面以上出土していて「銅鏡百枚」を大きく超えている。

などの指摘を受け、近畿説においても、卑弥呼の鏡とみる説は大きくトーンダウンしているように見える。

「曹操高陵」から出土した鉄鏡

昨年 2019(令和元)年 7 月 9 日から 9 月 16 日まで、東京国立博物館において「三国志」展が開催され、それに関連して、日中の学者による学術交流団座談会が行われた。

この席上、河南省文物考古研究員の潘 偉斌(はん・いひん)研究員から、

「2008 年に魏の曹操(155～220)の墓——いわゆる「曹操高陵」から出土した鉄鏡と、大分県日田市出土とされる金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡(きんぎん さく がん しゅりゅうもん てつきょう)が、画像で見ると、文様も装飾も酷似している。直径も 21 センチで、ほぼ同じ大きさだ」

との発言があり、マスコミも大きく報道した。



「曹操高陵」から出土した鉄鏡

大分県日田市から出土した鉄鏡——金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡

梅原末治氏(1893～1983 京都大学教授)は偶然にこの鉄鏡を奈良県古美術店より入手し、熊本大学教授の白木原和美氏の協力を得て、鉄サビなどを研磨したところ、金銀錯文が鏡面の一部に残っていた。

梅原氏はこの鉄鏡の出土経緯を知るため、1963 年(昭和 38)九州大学の岡崎敬氏とともに、発見者の日田市の渡辺音吉氏に聞き取り調査を行った。この結果、この鉄鏡は 1933 年(昭和 8)国鉄久大本線施設工事にあたり、採土の行われた三芳駅東方約 450 メートルのダンワラ台地裾に存在した竪穴式石郭を主体としたダンワラ古墳(日田市日高町・東寺 1933 年消滅)から出土したものと結論づけた。



金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡(国重要文化財)



铸铁製で、直径 21.3 センチ、厚さ 2.5 ミリの薄い扁平なつくりである。

文様は金銀錯の竜文が基調で、各所に玉を嵌装し、破損により全体の 3 分の 1 を遺すにすぎないが、旧状はよくうかがえる。四葉座の鈕を中心に、葉の間に「長宜●孫」の四文字を篆書体で表している。

中国から出土した鉄鏡

全洪氏の「試論東漢魏晉南北朝時期的鉄鏡」(『考古』1994)によると、

「後漢魏晉南北朝時代の鉄鏡の出土地域は、河南・河北・北京・陝西・遼寧・甘肅・山東・江蘇・湖南・湖北・四川・江西・広東・浙江の県・市の 90 におよぶ墓と数遺跡から 140 枚ほど発見された。

時代別には後漢時代の墓から 60 枚以上発見され、その内訳は北方地域が 40 枚以上、南方地域が 10 枚あまりで、黄河と長江流域に集中していた。魏晉時代の墓からは 30 枚ほど発見され、その内訳は北方地域が 20 枚以上、南方地域からは 10 枚ほどであった。その北方地域は洛陽を中心とし、南方地域は寧鎮(南京・鎮江一帯)および太湖付近を中心としていた」

と、後漢時代から中国において鉄鏡が製造されていたことが明らかにされており、日田出土の鉄鏡も中国産である可能性がきわめて高い。しかも、曹操の鉄鏡と日田の鉄鏡の直径はほぼおなじ 21 センチである。ちなみに、魏晉時代の 1 尺 = 10 寸 = 24.1 センチで、21 センチといえば 9 寸である。すなわち、曹操の鉄鏡と日田の鉄鏡は 9 寸鉄鏡ということになる。

9 寸鉄鏡は、下記のとおり、日中で 2 面ずつ計 4 面出土している。

日本	日田出土金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡	直径 21.3cm	夔鳳(きほう)鏡 「長宜●孫」銘	日田の地
	岐阜一之宮神社蔵鉄鏡 (岐阜県吉城郡国府町・高山市)	直径 21.2cm	夔鳳鏡 「長宜■孫」銘	飛騨の地
中国	甘肅省武威雷台漢墓出土金銀錯鉄鏡	直径 21 cm	夔鳳鏡 「長宜子孫」銘	後漢の靈帝・獻帝(186 ~219)
	曹操墓金錯鏡	直径 21 cm	夔鳳鏡	魏の曹操 (155~220)

以上のように、4 面とも夔鳳(きほう)鏡であり、3 面が「長宜子孫」銘鏡である。

中国文献に記された鉄鏡

そして、中国文献にも鉄鏡のことが記されている。

①『北堂書鈔』(隋の時代の書)

「魏の武帝(曹操)は(1)尺 2 寸の金錯鉄鏡 1 枚を、皇后は 7 寸の銀錯の鉄鏡 4 枚を持っていた」

②『初学記』(唐の時代の書)

「魏の武帝は(1)尺 2 寸の金錯の鉄鏡を持っていた」

③『曹操集約注』(魏の曹操の書いたものに注をつけたもの)

「皇帝は(1)尺 2 寸の金錯鉄鏡 1 枚を、皇后は銀錯 7 寸の鉄鏡 4 枚を、貴人・公主は 9 寸の鉄鏡を持っていた」

④『太平御覧』(宋の時代の書)

「魏の武帝(曹操)が皇帝(獻帝)に献上した雑物(御物)のなかに(1)尺 2 寸の金錯鏡 1 枚、皇太子の雑物として純銀錯鏡 7 寸の鉄鏡 4 枚、貴人・公主用の 9 寸の鉄鏡 40 枚があった」

以上の文献をまとめれば、次のようになる。

クラス	鏡の種類	直 径		備 考
皇帝	金錯鉄鏡	1 尺 2 寸	28.9cm	
貴人・公主	銀錯鉄鏡	9 寸	21.7 cm	日田の金銀錯鉄鏡 21.3 cm
皇后・皇太子	鉄鏡	7 寸	16.8 cm	

貴人は皇帝の妃、公主は皇帝の娘とされる。

皇帝は金錯 1 尺 2 寸、貴人・公主は銀錯 9 寸であるから、日田の鏡は大きさだけからいえば、貴人・公主並みの 9 寸であるが、金錯・銀錯が施されているため、貴人・公主以上、皇帝以下のクラスとみることでもできよう。加えて宝石による装飾が施されており、豪華さという観点からみれば、まさに比類のない一品である。海を越えてはるばる使者を派遣した卑弥呼に下された特別の鏡にふさわしい。

中国の潘 偉斌研究員も、九州国立博物館を訪れ、実際に金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を見たうえで、「銅鏡百枚のうちの1枚か、あるいは別ルートで入手した鏡であろう」

「金錯や銀錯が施される鏡は王宮関係に限られる。この鏡は国宝級の貴重なものであり、公式なルートで日本に伝わったと考えられる」と述べている。

このように、日田の鉄鏡は知る人ぞ知る鏡であったが、邪馬台国近畿説の立場からみれば、卑弥呼とは無関係の鏡であり、出土状況やその後の経緯などからしても、うさんくさい鏡であり、その価値を認めることはできないとして、この鏡を論じること自体に激しい拒絶反応・アレルギー反応を示す傾向が強い。

しかしながら、曹操の鉄鏡の登場によって、邪馬台国九州説を補強するきわめてきわめて重要な物的証拠の一つになったといえよう。

日田と筑紫平野

日田は豊後に属するが、地形的にみれば、筑紫平野の東端——日の立ち上る方向に位置している。日田という地名は筑紫平野の中心地から見た呼称である。そして、日田と筑紫平野の関係は、古く長い。

(1)立岩(飯塚市)の石庖丁と今山(福岡市西区)の石斧の分布(紀元前2世紀ごろ～)



田中 琢著『倭人争乱』(1991 集英社)

(2)カメ棺文化圏の一角としての日田(紀元前2世紀ごろ～)

橋口達也著『甕棺と弥生時代年代論』(2005 雄山閣)

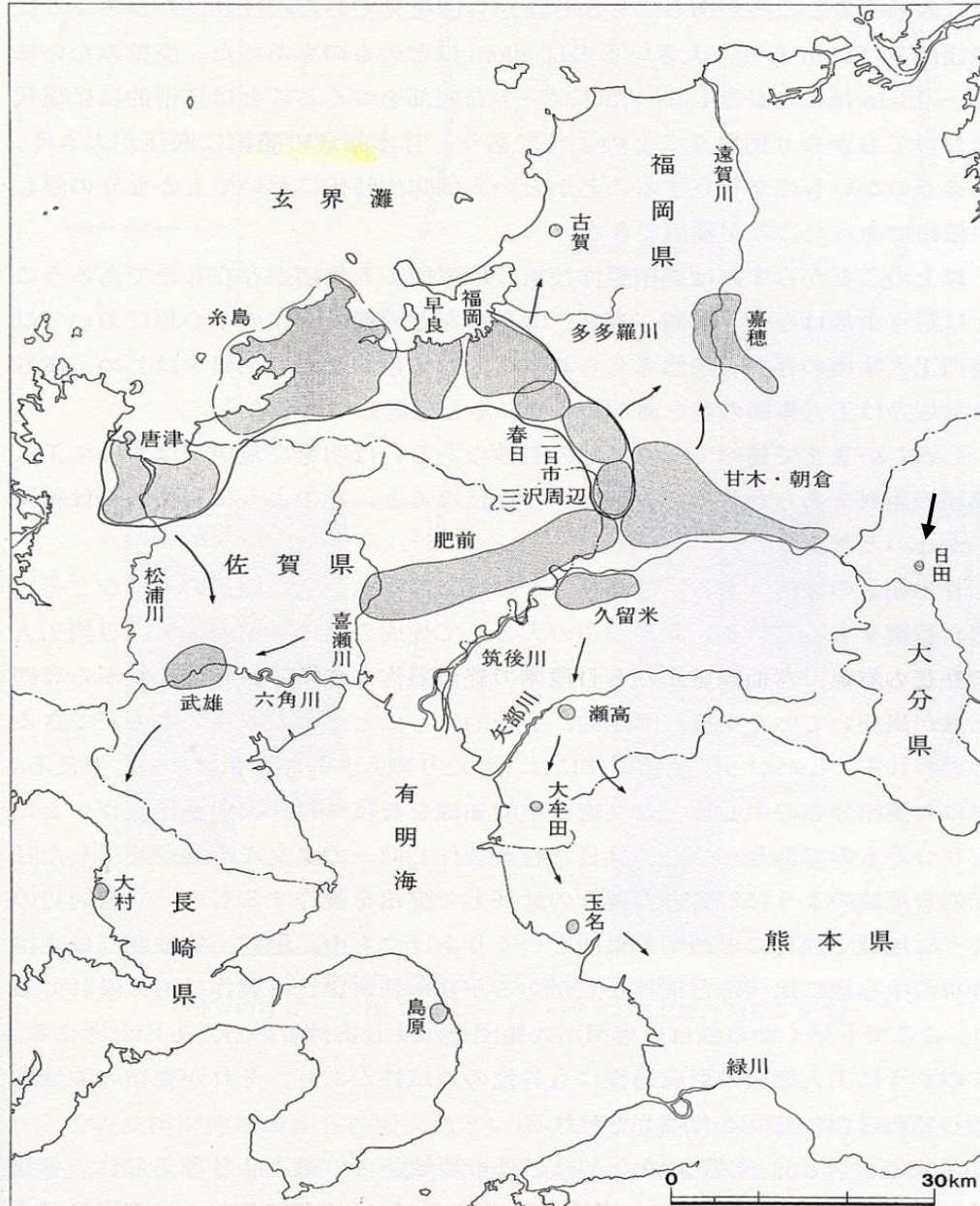


図 51 甕棺分布と地域差 (1/1,000,000)

① 日田はカメ棺文化圏に属する

金印奴国の時代の文化圏の特徴であるカメ棺は、筑後川をさかのぼって日田・玖珠地区に及ぶが水分峠は越えない。

② 東九州の文化圏には属さない

東九州地域から出土する下城式土器は日田・玖珠地区には及ばない。

久津媛の伝承

『日本書紀』『豊後国風土記』は、日田に久津媛という女神がいたことを記している。

『豊後国風土記』には、

「むかし、纏向の日代の宮に天の下をお治めなされた大足彦天皇(景行天皇)が球磨贈於を征伐して凱旋なされたとき、筑後の生葉の行宮をお発ちになって、日田郡にお出ましになった。ここに久津媛という名の神があったが、人間になって出迎えて、この国の国状をよく判断して言上した。こういわけで久津媛の郡という。いま日田郡といっているのは、それがなまったものである」と記されている。

久＝日田は、『和名抄』では「日高」と書かれ、『先代旧事本紀』では「比多」と書かれる。

会所山は日田の聖地といわれる 3 つの頂上を持つ山で、東西に細長く見晴らしのよい西の頂上に久津媛神社(日田市日高)が鎮座している。祭神は久津媛神と大足彦忍代別命(景行天皇)で、神功皇后伝承も残されている。

会所山の西端中腹の鳥羽塚古墳(円墳)、南頂上の会所山古墳(北向古墳・横穴式石室)・後山古墳(円墳)などの古墳が確認されている。

久津媛がいつごろの人物で、何者なのかを伝える資料はないが、天照大神や卑弥呼とおなじく、女性を首長とする古代九州の統治法を共有していることからみて、邪馬台国の卑弥呼と何らかの関係があった可能性が高い。筑紫平野を拠点としたとみられる邪馬台国にとって、日田の地は東方の拠点を守護するきわめて重要な地であったからである。

金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が卑弥呼の鏡であるとすれば、卑弥呼が日田を拠点とした可能性もあり得よう。卑弥呼を継承した台与の可能性もあり得よう。そうではないにしても、卑弥呼あるいは台与——邪馬台国から特別の信任を受けた人物が、久津媛であった可能性もあり得よう。

いずれにしても、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が卑弥呼の鏡とした場合、邪馬台国九州説が飛躍的に進展する可能性を秘めている。

岐阜一之宮神社蔵鉄鏡

ところで、岐阜一之宮神社(高山市国府町名張字宮の前)に伝わる、もう 1 面の鉄鏡のことである。

この神社の祭神は、大国主命と田心姫命(宗像三女神の一人)の間に生まれた下照姫命(したてるひめ)である。創建時期は不詳であるが、古書に祭神は下照比賣命、下照大権現などと記されている。かつては、「一之宮大菩薩」と称し、「大宮」または「一之宮」と称したという。

この神社の一角に一之宮古墳があった。7世紀頃の古墳とされる。

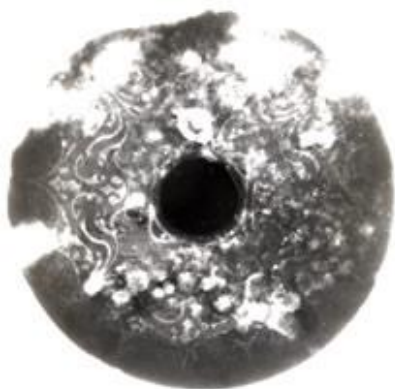
明治4年(1871)、一之宮神社社殿拡張工事に際し、社殿北西の古墳から鉄鏡1面のほか、鐔(つば)3点、直刀2本、金環6個、銅鈴3個、鉄鏃(てつぞく)29本、鉄製鎌、鉄釘など計 50 点が出土した。

これらは、一之宮神社で保管されていたが、昭和 60 年三重大学教授八賀晋氏がエックス線撮影調査をおこなったところ、鉄鏡は直径 21.2cm で、中心から四方に伸びた四枚の葉の間に、向かい合った一本足の鳥が 2 羽ずつ計 8 羽ほどこされた中国製の「夔鳳鏡(きほうきょう)」と鑑定された

のである。鉄鏡の表面は、表裏とも腐食しているため、鉄の酸化を防ぐ保存処理が施された。岐阜県指定重要文化財(昭和 62 年 1 月)。



錆に覆われた鉄鏡



エックス線画像

日田の鉄鏡と同じ 9 寸鉄鏡・夔鳳(きほう)鏡・「長宜子孫」銘鏡である。

日田と飛騨が似ていることも気になる。

これまた中国産と断定してさしつかえなかろう。それがどうして飛騨の地から出土したのか。

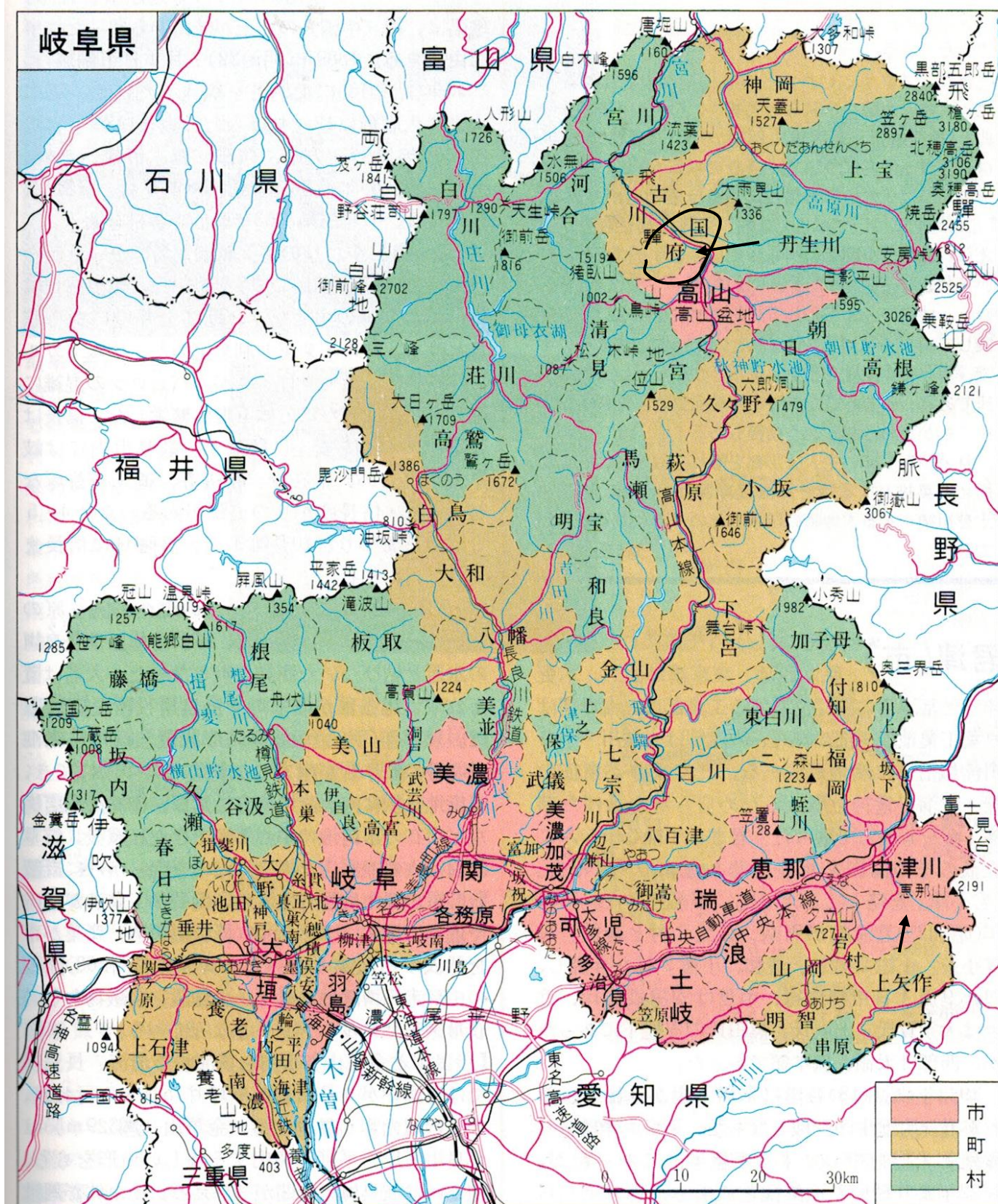
飛騨を治めたのは尾張一族

『先代旧事本紀』によれば、斐陀国造として、志賀高穴穗の朝(成務天皇)の時代に、尾張連の祖の「瀛津世襲命(おきつよそのみこと)」の児(こ)の「大八椅命(おおはしのみこと)」を国造に定めたといい。尾張氏系譜からみて、この場合の「児(こ)」は「末裔」という意味である。

尾張氏といえば、神武天皇に先立って九州から近畿に東遷した天火明命(ニギハヤヒ)の末裔氏族である。ということは、飛騨の鉄鏡はニギハヤヒとともに九州から近畿にもたらされ、その後尾張に拠点を移した尾張一族の末裔である「大八椅命(おおはしのみこと)」が鉄鏡を携えて国造として赴任した可能性が高い。飛騨の鉄鏡が、中国から直接もたらされた可能性は薄い。いずれにしても、九州を経由してきたはずである。

(4)飛騨の国





飛驒は、斐太、斐陀とも書かれた。大分県の日田とほぼ同じ発音といていい。

東山道の要衝の地で、飛驒支道の終着点である。国府町と呼ばれるのは、飛驒国の「国衙」があったことに由来する。

国府からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が多数出土し、岐阜県最大の前方後円墳や古墳群がある。飛驒地方で 500 余の古墳が発見されているが、そのうち 390 基が国府町内にある。

「日田」あるいは「飛驒」の意味するところ

日田と飛驒の共通点は、

- (1) 日(太陽)が昇る方向・・・それを見る人々は西方にいる。
- (2) 東へ向かう前進基地・・・その勢力の中心は西方にある。

ということである。まとめると、次のようになる。

政治の拠点——「都」は、時代によって異なるが、都からみて東方の最前線を、日田・飛驒・日高と呼んだのではないか。

明治になると、「日高」は津軽海峡を越えて北海道に渡った。

すなわち、日田—飛驒—常陸—日高見—日高という地名には、日本の成り立ちの軌跡が刻まれているのではないか。

	別 称	説 明
日田(大分県)	日高(和名抄) 比多(先代旧事本紀) 久津媛(豊後国風土記)	・筑前・筑後、豊前・豊後、肥後国が接する要衝の地 ・上座郡(恵蘇八幡)から約 20 km ・平塚川添遺跡から約 30 km
飛驒(岐阜県)	飛驒(本字) 斐太 斐陀	・東山道——飛驒支道の要衝の地 ・国府からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が多数出土し、岐阜県最大の前方後円墳や古墳群約 390 基がある。
常陸(茨城県)	日高見(常陸国風土記)	・古代東海道の終着点 ・ヤマトタケルの蝦夷討伐の前進基地
日田の意味	邪馬台国時代	日田(大分県)【邪馬台国筑紫平野説を補強する。】
	神武東遷以前	九州の東方 『釈日本紀』は神武東征以前、大和が日高であったとする。
	神武東遷以降	飛驒(岐阜県)・常陸(茨城県)。本州の東方
	ヤマトタケル ～坂上田村麻呂	日高見国＝北上川(岩手・宮城県)まで前進
	結論:王権の支配する地の東方——日の出の方向にある国	

古代中国の鏡？なぜ大分に

華麗さでは随一と多くの考古学者が太鼓判をおす古の鏡がある。「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」。大分県日田市で戦前に見つかったものとされ、装飾の巧みさから1964年に重要文化財に指定された。由来を含め多くの謎が残るこの鏡が、三国志の英雄・曹操の墓から出土した鏡とほぼ同じ型式である可能性が高まっている。「皇帝の所有物にふさわしい最高級の鏡」がなぜ九州に――。研究者らは首をかしげる。

金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が学界に紹介されたのは63年。青銅器研究に大きな足跡を残した考古学者・梅原未治（1893～1983）が美術研究誌「国華」で取り上げた。国華によると、直径21.3センチ、厚み2.5センチ。表面には金で龍文が、銀で爪などが象嵌され、所々に赤や緑の貴石をはめ込む。中央に子孫の繁栄を祈る「長宜子孫」の4字（子は欠落）が金象嵌で刻まれている。

古美術商から購入し、表面を覆うさびを削ったところ、これらの装飾が確認されたと報告。「中国本土で

も（略）稀なこの鏡」と評した。日田での出土品だと古美術商から聞いた梅原は、出土地とおぼしき場所を調査。出土時に立ち会った人の話も聞き、33年の鉄道工事の際に出土したものと推定した。梅原は出土地の地名から、この遺跡を「ダンワラ古墳」と名づけたものの、埋葬施設の詳細は不明。さらに、一緒に出土したとされる馬具は6世紀以降のごく一般的なもの、超一級の鉄鏡の持ち主にはそぐわない



④「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」＝「国華」から
⑤曹操高陵出土の鉄鏡。全面さびに覆われている＝潘偉斌研究員の発表から



「曹操の墓から出土の鉄鏡と酷似」指摘も

い。「本当にダンワラ古墳と呼ばれる場所から出土した鏡か」と疑問を呈する研究者も少なくなかった。

半世紀経て新知見

それから半世紀余。新たな知見が明らかになったのは先月初め。東京国立博物館で開催中の「三国志」展（16日まで）に関連して開かれた学術交流団座談会のことだった。「X線で調べたところ、象嵌の龍と思われる文様が見つかった」。2008年に曹操の墓と確認された「曹操高陵」から出土した鉄鏡について、河南省文物考古研究院の潘偉斌研究員が発言。「画像でみる限り、文様も装飾も日本の大分県日田市から出土したという鏡に酷似している。直径も21センチでは同じ大きさだ」と興奮気味に語った。

座談会に参加した東京国立博物館の市元星主任研究員は「ダンワラ古墳出土とされる鏡は後漢・魏のものと考えられており、曹操高陵出土の鏡は重要な比較資料になる」と話す。曹操（155～220）が礎を築

いた魏。その鏡といえは、中国の史書「魏志倭人伝」に有名な記述がある。邪馬台国の女王・卑弥呼が魏の皇帝から「銅鏡百枚」を贈られた、というものだ。大阪府立狭山池博物館の西川寿勝学芸員によると、中国では後漢末に銅鏡が乱造されて銅の価値が下がり、鉄鏡の方が貴重品となった。曹操自身も金象嵌の鏡を後漢皇帝に贈ったとの記録もあり、「魏でも最高の鏡はダンワラ古墳出土とされる鏡

のような鉄鏡だった可能性が高い。そんな鏡が北部九州の日田から出土するには、どのような経緯が考えられるのか。

地元を中心に期待を込めて語られるのが、卑弥呼が銅鏡とは別に特に贈られたとする説。卑弥呼の没後、その地が周辺に伝えられ、直後か数百年後に埋められたとみる。邪馬台国九州説の論者には重要な材料で、日田説を唱える人も。鏡の復元品は天領日田資料館の展示の目玉だ。

不明点多いまま

だが多くの考古学者はやや距離を置く。九州大学の辻田淳一郎准教授は「出土状況や遺跡の時期が不明確なため、位置づけが難しい」と話す。「中国でも最高級の鏡が日田地域で出土したことの説明が困難で、もしダンワラで出土したとするなら、近畿などの別の土地に当初持ち込まれたものが、日田地域に搬入された可能性が考えられる」とみる。佐賀女子短期大学の高島忠平名誉教授は「ダンワラ古墳の出土品では

ないのでは」と指摘する。梅原の下で鏡を研磨した白木原和美・熊本大学名誉教授が今年、ある研究者の追悼文集に寄せた文章などが根拠だ。ダンワラの鏡について、立ち会った人は石灰と一緒に須恵器に入れたと話したという。須恵器に入る程度の小さい鏡であることから、21センチもある金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡とは別の鏡だった可能性を示唆したという。高島名誉教授は「出土地について古美術商が言うことは必ずしもあてにならない。あの鏡を邪馬台国九州説の証しと考えるのは厳しい」。

狭山池博物館の西川学芸員は「出土地をめぐる謎は逆に深まった感があるものの、鉄鏡は日本列島の5世紀以降の古墳から5面前後出土しており、潘研究員の指摘がこれらを再検討するきっかけになるのでは」と話す。（編集委員・宮代栄一）

【Ⅱ】天照大神の鏡——八咫鏡を中心として

天の岩戸

三種の神器の一つの八咫鏡は、天照大神の岩戸隠れの際にはじめて登場する。

出雲に追放されることになったスサノオは、別れを告げるために姉の天照大神のもとを訪れたが、神聖な衣を織るための機屋（はたや）に皮を剥いだ天斑駒を投げ込むなど乱暴狼藉を働いた。

天照大神は怒って、天の岩屋を閉じて籠ったので国中が常に暗闇となり昼夜の区別もつかなくなった。八十万神は天の安河の河原に集まり、天の岩戸の前で祭祀を行うことになった。



『図解 古事記・日本書紀』(東京堂出版)

八咫鏡は、このときイシコリトベ(石凝戸辺)によってつくられた。「トベ」は女性をしめす。

『古語拾遺』には、「天糠戸(あめのぬかど)の子、作鏡連(かがみづくりのむらじ)らの遠祖(とおつおや)」とされ、『日本書紀』神代上第三の一書に「鏡作の遠祖の天抜戸」と記されている。第二の一書では、天糠戸が八咫鏡をつくったとされている。天糠戸・イシコリトベ(石凝戸辺)親子は鏡作りの専門集団を率いていたのであろう。

八咫鏡とともに榊の木に掛けられた八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)は、玉祖連(むらじ)の祖の玉祖命がつくった。『古語拾遺』によると、櫛明玉神(くしあかるたま)とされている。

八咫鏡と八尺瓊勾玉は、榊に取り付けられ、忌部氏の祖の太玉命がそれを掲げて天の岩戸の祭祀に臨んだ。太玉命はタカミスビ(高皇産靈尊)の子とされ、鏡や玉などのモノづくり集団を率いていたのであろう。

やがて、八咫鏡・八尺瓊勾玉・草薙剣は天照大神の孫のニニギノミコトに継承され、その後神武天皇とともに近畿に移動し、天皇家の三種の神器となった。——これが日本の古代文献が一致して伝える伝承である。

試作された二面の八咫鏡

実は、『古語拾遺』には、八咫鏡の試作品がつくられたことが記されている。

「イシコリトベをして日の像(みかた)の鏡を鑄さしむ。はじめに鑄たるはいささか意に合はず。これ紀伊国の日前神(ひのくまのかみ)なり。次に鑄たるはその形、美麗し。これ伊勢大神なり」

これによると、日前神と名づけられた鏡が一面試作されている。

ところが、「日前神宮(ひのくまじんぐう)」と「國懸神宮(くにかかすじんぐう)」（和歌山市秋月）の社伝によると、ご神体として「日像鏡(ひがたのかがみ)」と「日矛鏡(ひぼこのかがみ)」という二面の鏡が伝えられている。

神武東征の後の神武天皇 2 年、紀国造家(紀氏)の祖の天道根命(あめのみちねのみこと)が、二面の鏡を賜り、日像鏡を日前宮に、日矛鏡を國懸宮にそれぞれ奉納したという。

なお、これまで実物が公開されたことがなく、調査されたこともないため、社伝どおりであるかどうかは確認されていない。

八咫鏡が伊勢神宮へ移される

国内情勢の不安の原因が天照大神と倭大国魂神の二神を朝廷の居所に祭っていることにあると考えた第 10 代崇神天皇は、豊鍬入姫命に命じて天照大神——すなわち八咫鏡を宮中から笠縫邑(かさぬいのむら)に移して祭らせた。

倭大国魂神については淳名城入姫命に命じて祭らせたが、髪が落ち、体は痩せて祭祀を続けることができなくなったので、倭迹迹日百襲姫命の夢のお告げにより、大倭直の祖の長尾市宿禰を祭主として祭らせた。これが、大和(おおやまと)神社(奈良県天理市新泉町星山)である。

一方、八咫鏡は豊鍬入姫命から倭姫命に託され、倭姫命は天照大神を奉斎しながら伊賀・近江・美濃・尾張などの諸国を経て、最後に伊勢に行き着いた。これが伊勢神宮の起源である。



形代(レプリカ)の製作と三種の神器の変遷

朝廷において、伊勢に移された八咫鏡と草薙剣の形代(レプリカ)がつくられた。『古語拾遺』には、「イシコリトベ(石凝戸辺)の末裔と天目一箇神(あめのまひとつのかみ)の末裔二氏に命じて鏡を鑄、剣を造らしめた」

とある。

これが、現在皇居にある八咫鏡と草薙剣である。

なお、草薙剣については、倭姫命からヤマトタケルにわたされ、尾張の宮簀媛(みやすひめ)を経て、現在熱田神宮(名古屋市熱田区神宮)のご神体とされている。

宮中の八咫鏡と草薙剣の形代(レプリカ)は、安徳天皇とともに壇ノ浦に沈んだが、その後引き揚げられ、現在は皇居に置かれている。

伊勢神宮の八咫鏡は、何度か本殿の火災等に遭遇することもあったが、現在でも伊勢神宮のご神体として守られている。

熱田神宮の草薙剣は、新羅の僧道行に盗難されるという事件もあったが、無事に取り戻され、宮

中から再び熱田神宮に移され、現在でも熱田神宮のご神体として守られている。

もちろん、宮中の八咫鏡、伊勢神宮の八咫鏡、熱田神宮の草薙剣も、公開されたことはなく、調査も行われていないため、現物がどのようなものか誰も知る人はいない。

三種の神器の変遷をまとめると次のようになる。

八咫鏡		草薙の剣		八咫瓊勾玉
イシコリベ(石凝姥命)が作製		ヤマタノオロチの尾から		玉祖命が作製
実物	形代 (レプリカ)	実物	形代 (レプリカ)	実物
天照大神 (天の岩戸)		八岐大蛇の尾から 出た剣をスサノオが 得る。		
		天照大神に献上		
ニニギノミコトに授与		ニニギノミコトに授与		
神武天皇が継承		神武天皇が継承		
大和の笠縫邑 (豊鍬入姫命)	忌部氏が作成 (宮中) 	大和の笠縫邑 (豊鍬入姫命)	忌部氏が作成 (宮中) 	
伊勢(倭姫命)		伊勢(倭姫命)		
		ヤマトタケル		
	壇ノ浦 	宮簀媛	壇ノ浦	壇ノ浦
		熱田神宮		
		僧・道行が盗む		
		宮中へ戻る		
		熱田神宮		
伊勢神宮	皇居 「賢所」	熱田神宮	皇居 「剣璽の間」	皇居 「剣璽の間」

なお、『皇太神宮儀式帳』(804 年)によると、伊勢神宮の八咫鏡は、内径 1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)の鏡箱の中に収納されていたという。『延喜式』にも、鏡箱の内径は、1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)とある。

ということは、八咫鏡の直径は、1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)よりもやや小さい鏡の可能性が高い。

平原遺跡(福岡県糸島市)から出土した大型鏡

福岡県糸島市といえば、邪馬台国時代に伊都国があった地域である。末盧国(唐津市)、奴国(福岡市・春日市など)とともに、稲作を中心とした弥生文化の先進的な地域である。邪馬台国の海の玄関口とされ、一大率を配置し、諸国を監察した。「世々王あり」と、卑弥呼の時代になっても伊都国王が継承されていた。

その伊都国の中心部の瑞梅寺川と雷川にはさまれた曾根丘陵から、昭和40年、ミカン園の造成中に多数のガラス片や多くの遺物とともに、直径46.5センチの巨大な内行花文鏡が破砕された姿で発見され、原田大六氏を主任調査員として福岡県教育委員会による調査がおこなわれた。

1号墓は、東西約14メートル、南北約10.5メートルの長方形の方形周溝墓で、出土した遺物などから弥生時代後期中頃と推定されており、邪馬台国時代と重なる時代の遺跡である。

墓の周囲には幅1.5メートルから3.3メートル、深さ30センチから10センチ程の周溝があり、中心部には、長さ3メートル、幅90センチの割竹形木棺(丸太を半分に割り、中をくり抜いて再び合わせ棺とした物)が埋納されていた。

鏡類だけでいえば、大型鏡5面+35面=40面が出土しており、1つの墳墓から出土した銅鏡の枚数としては日本最多である。

原田大六氏は「大型内行花文鏡の「文様」と「大きさ」から「八咫鏡」と解し、伊勢神宮の八咫鏡も同型の鏡なのではないかと推測した。

勾玉や管玉などの装飾品が多く、武器類が少ないため、埋葬された人物は「女性」と考えられている。伊都国王の墓とみる説が多いが、原田大六氏は天照大神の墓と断じた。

奥野正男氏は卑弥呼の墓とし、最近では安本美典氏もこれに同調されている。

なお、平原遺跡から出土した大型の内行花文鏡(内行花文八葉鏡)5面は、すべて仿製鏡(日本製)とみられている。直径46.5センチという巨大な鏡である。一面の重さは約8kg。

直径46.5センチといえば、前述した『皇太神宮儀式帳』と『延喜式』に記された、鏡箱の内径は、1尺6寸3分(49.4センチ)にちょうど収まる大きさである。



10号鏡 直径46.5cm、内行花文八葉鏡



12 号鏡 直径 46.5 cm、内行花文八葉鏡

八咫鏡とは

「咫(あた)」は、古代中国の長さの単位である。『説文解字』には、「中婦人手長八寸、謂之咫。周尺也」とある。「周代の尺で女性の手の長さ 8 寸を咫という。」という意味である。

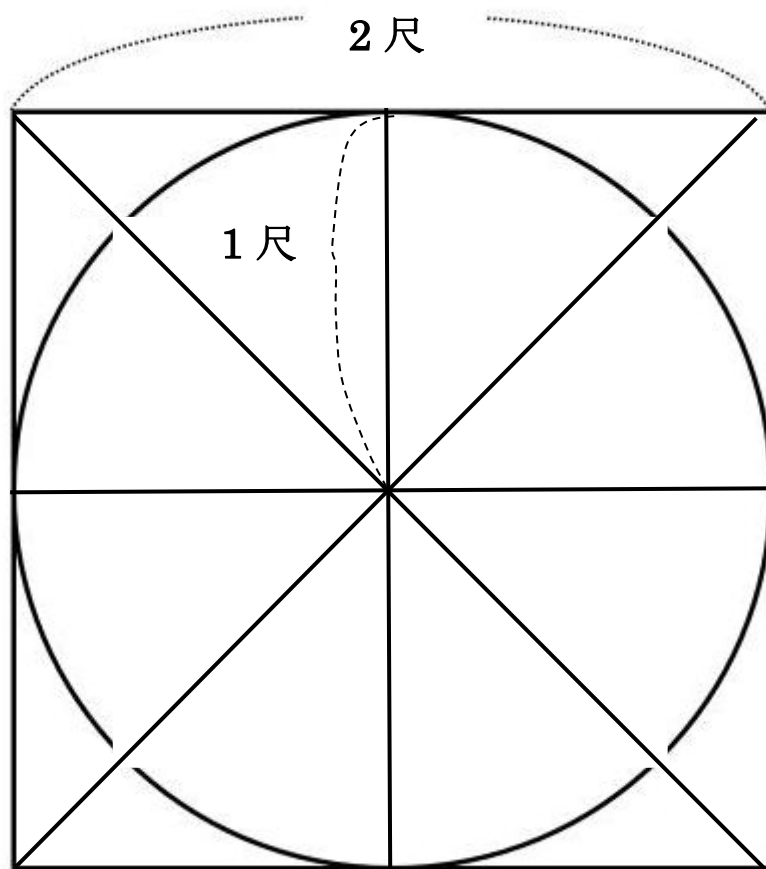
すなわち、8 寸=0.8 尺=1 咫(あた)となり、1 尺=1.25 咫(あた)となる。

男性の手を広げたときの親指と中指の間の長さが 1 尺の起こりで、女性の指は男性よりも短いことから、0.8 尺とされたとみられる。ちなみに、漢代の 1 寸は約 2.3 センチで、1 尺は約 23 センチとなる。平原遺跡の大型鏡の直径は 46.5 センチであるから、半径は約 23 センチ=1 尺ということになる。古代中国において、円周率が 3.14・・・ということはまだ知られていなかったはずである。

仮に円周率 3.2 で計算してみると、下記のとおりである。

	半径	直径	円周率	円周	×1.25
平原大型鏡	1 尺	2 尺	(3.2)	6.4 尺	8 咫

まさしく平原遺跡の大型鏡の円周はちょうど 8 咫となる。半径 1 尺、直径 2 尺、円周率 3.2 で計算すると、円周は 6.4 尺、咫に換算すると 8 咫となるわけである。 π の計算からみれば不正確ではあるが、咫の導入によって、簡単に円周が計算できる。ということは円の面積も簡単に計算できるということである。



正方形(A)			円(B)			A/B	B/A
全周	2 尺×4	8 尺	円周	2 尺×3.2	6.4 尺	1.25	0.8
面積	2 尺×2 尺	4 尺 ²	面積	1 尺×1 尺×3.2	3.2 尺 ²	1.25	0.8

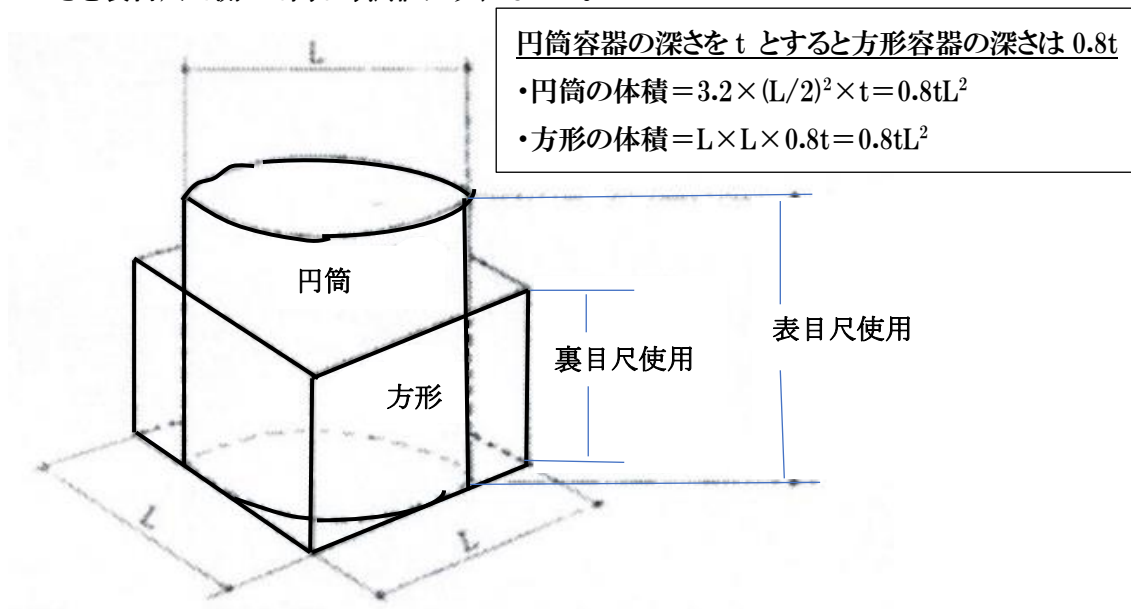
これは、いったい何を意味するのか。正方形の全周あるいは面積がわかれば、円の円周と面積が自動的にわかるということである。その逆もまたしかり。

古代人にとって、1.25 と 0.8 は神の定数である。

たとえば、通常の 1 尺を基準にした物差(表目尺)と、その目盛を 1.25 倍引き延ばした物差(裏目尺)を作成したとしよう。

- ① 円に外接する正方形の周囲を裏目尺で測れば、表目尺で測った内接円の円周となる。
 $\rightarrow 0.8L \times 4 = 3.2L = L \times 3.2$
- ② 円に外接する正方形の一辺を表目尺で測り、もう一辺を裏目尺で測ってかけ合わせれば、内接円の面積となる。これは、円の直径を表目尺と裏目尺で測ってかけ合わせれば、円の面積となるということでもある。 $\rightarrow L \times 0.8L = 0.8L^2 = 3.2 \times (L/2)^2$

- ③ 表目尺で正方形の面積を出し、その数値を表目尺上に取り、その長さを裏目尺で読めば、表目尺で測った内接円の面積となる。 $\rightarrow L \times L \Rightarrow 0.8L^2 = 3.2 \times (L/2)^2$
- ④ 同じ容量の円筒容器と方形容器を作るには、円筒容器の深さを表目尺で測り、方形容器の深さを裏目尺で測って同じ寸法値にすればいい。



厳密には、 $\pi = 3.14\cdots$ で計算すれば、1.25 は 1.273 $\cdots$ となり、円筒容器と方形容器に水などの液体を入れた場合には微差が生じることになるが、コメや豆などを測定する場合には、ほとんど問題にならないであろう。

1.25 倍の目盛をつけた裏目尺こそが、春秋時代に魯の公輸班によって考案されたと伝わる「魯班尺(ろはんしゃく)」であったかもしれない。周尺より 2 寸長い尺であったという。現在では本来の用途が忘れられ、「風水尺」とも呼ばれて占いの道具になっている。上下 2 段の目盛には吉凶の文字が付され、上段が「門公尺」、下段が「丁蘭尺」と呼ばれ、伝統的に上段の目盛が下段より長い。

このように、平原遺跡の大型鏡は、単に人の顔を映し、あるいは王者の権威を高めるための威信財としての用途のほかに、中国単位による長さや、面積・体積などを計算する魯班尺的な用途もあったのではないか。

中心部の八葉の文様は、東西南北の直角方向のほか東北・南東・北西・南西 45 度の方角を示す羅針盤としての用途もあったのではないか。

太陽光を反射する通信手段として用いられた可能性だってあり得る。

現代の数学者・物理学者が考えれば、もっと多くの用途が見つかるかもしれない。

北部九州のクニグニは、前漢時代から多くの中国鏡を入手している。とりわけ伊都国と奴国で顕著である。邪馬台国の卑弥呼もそうである。好物の鏡を「百枚」も入手している。詳細な全数分析はしていないが、日本で出土した前漢鏡と後漢鏡の直径は、1 寸あるいは 1 尺の一定割合を示し

ているものが少なくないように見える。もちろん鑄上がったときの伸縮によって誤差を生じるので、厳格な数値ではないものの、現在、日本で出土した鏡全体について、その総合的な分析を委託しているところであり、その結果が出たら明らかにしたいとおもっている。



立岩遺跡(福岡県飯塚市)の 10 号カメ棺から出土した前漢鏡 6 面

立岩遺跡前漢鏡	直径(cm) A	A÷1 尺(23.09 cm)	1 尺との比率
連弧文日有喜鏡	18.2	78.8	約 0.8
連弧文日有喜鏡	15.6	67.6	約 2/3
重圈精白鏡	17.8	77.1	約 0.8
重圈精白鏡	15.4	66.7	約 2/3
連弧文精白鏡	18.0	78.0	約 0.8
重圈姚姚皎鏡	15.9	68.9	約 2/3

平原遺跡の大型鏡は八咫鏡

結論からいえば、平原遺跡の大型鏡は、特別の用法を備えた特別の鏡として、特別に鑄造された可能性が高い。しかも、日本製である。

天照大神の八咫鏡も、その名のとおり八咫鏡にふさわしい。天の岩戸の祭祀に用いられ、代々天皇家に伝えられてきた。しかも、内径 1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)の鏡箱に平原遺跡の大型鏡が

ちょうど収まる大きさである。すなわち、平原遺跡の大型鏡は八咫鏡である。

まとめれば、次のとおりとなる。

八咫鏡	面 数
平原遺跡	5 面
宮中	1 面
伊勢神宮	1 面
日前神宮	1 面
國懸神宮	1 面
計	9 面

平原遺跡は考古学的情報であり、それ以外の古代神話・伝承が伝える情報は、すべて天照大神と関連している。卑弥呼の鏡かどうかはともかくとして、直接・間接に天照大神に関連した鏡であることはまちがいない。天照大神は九州と密接な関連がある。このことを平原遺跡は告げている。

神武天皇は九州から近畿に東遷したと記紀は記し、平原遺跡もまた九州に位置する。

作成者はタカミムスビ(高皇産靈尊)系統のおそらく忌部一族であろう。

北部九州の青銅器製造の中心センターは春日丘陵——奴国にあったから、そこでつくられた可能性が高いが、奴国の職人たちが伊都国を訪れて現地生産を行った可能性も考えられよう。

そのことを裏づける前例もある。邪馬台国よりはるか前の、紀元前 1 世紀の金印奴国の時代ではあるが、伊都国の王墓・三雲南小路遺跡である。その 2 号甕棺について、井上裕弘氏は『弥生・古墳文化の研究』(梓書院)のなかで、次のように記されている。

「伊都国王の女王墓ともいわれる糸島市三雲南小路 2 号墓の甕棺に奴国の中心となる一の谷型甕棺が採用されていること、その他にも地元の工人集団とは明らかに異なる集団が製作した甕棺が搬入された遺跡が数多く存在する」

伊都国王の甕棺などが奴国の職人の手によってつくられている。すでにこのような前例がある。忌部一族のルーツは奴国の可能性すら考えられる。

いずれにせよ、平原遺跡の大型鏡がどこでつくられたのか、今後の考古学的調査の進展を期待したい。

豊の国の神夏磯媛

『日本書紀』のなかに、仲哀天皇・神功皇后や景行天皇を出迎えるにあたり、鏡・剣・玉を櫛に飾って、九州の豪族が出迎えるくだりがある。

	上枝	中枝	下枝	根拠文献
神夏磯姫	八握剣	八咫鏡	八尺瓊	『日本書紀』景行天皇紀
熊鰐	白銅鏡	十握剣	八尺瓊	『日本書紀』仲哀天皇紀
五十述手	八尺瓊	白銅鏡	十握剣	『日本書紀』仲哀天皇紀

このうち、神夏磯姫(かむなつそひめ)が八咫鏡を携えて出迎えていることが注目されよう。

『日本書紀』は彼女のことを「一国(ひとくに)の魁師(ひとごのかみ)」と形容している。

「豊の国の王」のような意味である。しかも女性である。考えてみれば、卑弥呼を継いだ台与(壱与)、あるいは天照大神を継いだ万幡豊秋津師媛・天忍穗耳尊のその後の消息は不明である。

天照大神の長男とされる天忍穗耳尊は豊前の英彦山(日子山)に祭られ、万幡豊秋津師媛の父のタカミスビ(高皇産靈尊)は英彦山の七里四方の48の社(高木神社ないし大行事社)に祭られている。また、天照大神の娘の宗像三女神は宗像大社に、天照大神の孫のニギノミコト(瓊瓊杵尊)は嘉麻郡の馬見山に、おなじく孫のニギハヤヒ(天火明命)は遠賀川流域の鞍手郡に祭られている。

このように、天照大神の次世代の神々は、筑紫平野から山を越えた東北方面——豊前・嘉麻・鞍手・宗像などに祭られている。

そして、景行天皇時代(おそらく4世紀後半)に、八咫鏡を携えた神夏磯姫(かむなつそひめ)が登場する。『日本書紀』には彼女の出自はいつさい書かれていないが、神武東遷後に九州に残された高天原勢力ないし邪馬台国勢力の最後の女王が神夏磯姫であった可能性もあり得る。

もちろん、彼女の八咫鏡は失われているが、上記の9面の八咫鏡にこの一面の伝承を追加して整理することは許されるだろう。

天照大神は卑弥呼か

第一部の「卑弥呼の鏡」においては、卑弥呼の時代の鏡は後漢鏡であり、大分県日田市から出土したとされる「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」は魏の皇帝から卑弥呼に特別に贈与された可能性が高いことを論じた。

第二部の「天照大神の鏡」においては、八咫鏡が平原遺跡出土の大型鏡と同じである可能性について論じた。

安本美典氏は、約半世紀にわたり「天照大神＝卑弥呼」と主張されているが、邪馬台国九州説はここに今後の展望を見つけるべきかもしれない。

もし、天照大神＝卑弥呼であるならば、第一部の「卑弥呼の鏡」と第二部の「天照大神の鏡」がパラレルな関係として論じることが可能となる。

それは、戦後長らく見捨てられてきた『日本書紀』『古事記』の復活を意味する。

『魏志倭人伝』に大きく偏った片肺飛行から、日本の文献・伝承を加えた両肺飛行への大きな転換となる。

それは、戦後史観の打破にほかならない。